

説教「しもべ聞く、主よ 語り給え」

サムエル記 上 3 章 (口語訳聖書)

1976.1.11

日本バプテスト同盟 関東学院教会

1976 年を迎え、新年に当たって いろいろな知識人の対談を読んだり聞いたりする機会がありましたが、誰もが この年が良い年であることを願い、また期待いたします。しかし、世界の政治的・経済的状況は必ずしも期待しているような方向に行くかどうか、難しいと見ている向きがあります。物質文明が高度に成長しましたが、今、その成長が鈍ってきた。物質が人間を幸福にしてきたが、この見通しの暗い時代にあつて、人間として本当に生きてゆくために何が大切であるか、そういう反省や問いを持たない人はいないでしょう。多くの人々が何々神社に参拝し、何か分からないけれど、手を合わせて助けを求めているようです。参拝者が、正月とかお祭りの機会だけであつたとしても、多くの人々がそこに来るということは、この時代に何らかの救いを求めているということを暗示していると言えます。しかし、こうした参拝が一時的な気休めに終わってしまうなら、そうした態度は本物ではないでしょう。この見通しの暗い時代において最も大切なことは、「神に聞く」という態度であると信じます。今朝は、先ほど読んでいただいた ^{こんちょう}サムエルの少年時代に起こった出来事を通して、このことを学びたいと思います。

サムエルが生まれたのは、旧約で士師の時代がようやく終わり、イスラエルに新しい時代が始まろうとするときでありました。士師の時代というのは、カナン (パレスティナ) にイスラエルの各部族が侵入し、各地を征服して、その土地に定着し始めた時代ですが、それは、周りの先住民やアラビアの砂漠から来た新しい他の民族の侵入によって脅かされ、苦しめられた時代でもあります。神の霊を注がれた力強い勇者が立って、敵の攻撃からイスラエルを救いました。しかし、それは一時的な勝利であつて、士師という指導者が死んでしまうと、再び外敵に脅かされる。そんなことが繰り返されてきました。また、内面的には、カナンの農耕文化に仲間入りするので どうしても接触が避けられず、イスラエルをこれまで導いてくださった神を忘れがちになって、カナンのバアルの神々に身をかかめるようになったのです。その結果、カナン宗教の慣習に染まり、物質的・享樂的な生活に^{おぼ}溺れかけていました。士師記を読みますと、当時 どんなことが行われていたかが記されています。人はこの時代を、イスラエルの「暗黒時代」と呼んでいます。土地を獲得し、定着し、そして外敵の侵入を防ぐことに明け暮れたためと カナン文化を吸収し始めたことによって起こったもので、イスラエルが神を忘れ、神をないがしろにしていた時代であるのです。士師記の終わりに、イスラエルはおのお

の自分の目に正しいと見ることを行なった、とあります。

さて、サムエルが育ったシロという神殿には、祭司エリという人がいました。このへんの事情については、サムエル記 上の 1～3 章を読んでくだされば分かります。3 章 1 節に、「サムエルは、エリの前で、主に仕えていた。そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった」と記されています。祭司は神殿で祭儀を司^{つかさど}るのですが、犠牲^{きさき}を献げたり 礼拝したりするだけでなく、神の言葉を受けて、それを語ってもいたようです。ところが、その神の言葉がそのころ、祭司エリにはほとんど語られなくなっていた。サムエルはまだ少年にすぎず、祭司エリのもとで祭司としての修行中の身でありました。神の言葉は祭司を通じて民に語られていたのに、その言葉が与えられなかった。これはイスラエルにとって、危機を意味しています。士師の時代のいわゆる「暗黒時代」と本質的には変わらない状況にあったことを、このことは物語っています。祭司エリにはかつて頻^{ひんぱん}繁に神の言葉が告げられたようですが、このころは、それが途絶^{とだ}えがちになっていたというのです。

神の言葉は祭司を通して民に与えられたのですが、その祭司に神の言葉が告げられなくなった。この事態をどう考えるべきか。神が語るのをお止め^やになったのか。神は寝ているのか。どこか遠くに旅に出て、留守なのか。人間はそんなふうにも、この事態を勝手に判断します。しかし聖書は、神が生きて働く神であり、イスラエルと常に共にい給う神であると言っております。であれば、神がいないのでも、死んだのでもない。神は語りかけようとしておられるのだが、それを聞く人間の側に問題があったと考えねばなりません。実は、エリは年老いていたので、神殿の犠牲に立ち会うのはその息子たちでした。しかし その息子たちは、民が献げるものを正しい規定に従って 民に代わって神に献げるのが仕事でしたが、その献げられたものを横取りし、自分の腹を満たしていた。聖書はそれを、「この人々が主の供え物を軽んじた」(2:17) と言っております。神に仕える祭司の務めを怠り、神をないがしろにしている態度でありました。父親のエリも、彼らの不道德^{とが}を咎めはしたものの、それを止め^やさせる力はなかった。ここに、神の言葉が語られなくなった原因がありました。

そうしたある日の夕方、神殿のともし火がいまだ消えていないとき、堂守^{どうもり}の役目をしていた弟子のサムエルが 神の契約の箱が安置してあった本堂の部屋に番をして寝ていたのです。そのとき、「サムエル！ サムエル！」(4) と呼ぶ声を聞いた。声の主^{ぬし}は年老いた祭司エリ以外には考えられないので、サムエルはエリのもとに行き、「お呼びでしたか」(5) と言いました。エリは、少年のことだから 夢でも見たのだらうくらいに思い、「私は呼ばないよ」(同) と答えて、サムエルを帰らせた。ところが、二度・三度 同じことが起こって、少年がエリのもとに来たので、祭司エリは初めて、「これは、サムエルが夢か何かで寝ぼけて言っておるのではない。サムエルははっきり、自分を呼ぶ神の声を耳にしたのだ」ということを知ったのでした(8)。エリは、その声の主^{ぬし}が神であることを直感します。しかし、サムエルには説明はしなかった。ただ、「今度 呼ばれたら、こう言いなさい」(9) とだけ言いました。「しもべは聞きます。主よ、お話してください」(同) と(文語訳では、「僕 聴く、

エホバ 語りたまへ)。しもべとは、いつでも主人の言いつけを聞き、それに従う用意ができている人のことです。神が語りかけてくださるのを聞く心構えが最も必要でありました。今、それがイスラエルの人々に欠けていたのです。サムエルがこの時代に登場したということは、神の言葉が聞かれなかった暗黒の時代が終わり、神の言葉に耳を傾けて聞こうとする人物が現われたということです。これは、新しい黎明^{れいめい}が始まったことを物語るものでした。

神の言葉が聞かれる。これがイスラエル本来の姿であります。カナンに侵入し、カナンの文化に同調し、定住することに心を奪われて、神を忘れ、神に聞くことを怠っていた。エリとその息子たちがシロの神殿でしていた悪事は取り除かれねばなりません。サムエルに語られた神の御言葉^{みことば}は正しく、エリの家族に対する神の裁きの言葉でありました。神の言葉に背を向けて勝手なことをし、私腹を肥やしてきた者が裁かれて、神に聞く新しい一人の人物を通し、イスラエルに 神の言葉が聞かれる。そして、それが語られる時代が到来したのです。その転機を担ったのがサムエルであり、この夜に起こった出来事がイスラエルにとって、本来の姿に立ち戻る出発点となったのであります。21 節にありますように、サムエルは成長し、エリに代わって シロにおいて神の言葉を聞き、その言葉がサムエルを通してあまねく イスラエルの人々に及んだ。エリは祭司であると同時に、神の言葉を受け、それを語りました。サムエルも祭司として育てられましたが、この時から、祭司であるだけでなく、預言者として神の言葉を告げる者とされた。そして、イスラエルの民に尊敬され、愛される人物になるのであります。預言者サムエルを通して イスラエルは統一へと向かい、王国建設への道を誤りなく進む基礎が造られたのであります。その後の歴史がこれを証明しています。

暗黒の時代に新しい黎明の転機をもたらしたのがサムエルでありました。「しもべは聞きます。主よ、お話してください！」人間の言葉や風説ではない、神の言葉に耳を傾けること。これが選ばれた者にとって最も大切なことであり、そうして初めて、時代の闇を照らすともし火となることができるのであります。否、そうならなくてはなりません。そのために 神に召し出され、神の教会の一員とされたのであります。私たちの周囲に神の言葉が聞かれ、学ばれ、そして受け入れられるように、私たちはその道具とならねばなりません。そのために仕え、しもべとならねばなりません。神の言葉を真剣に聞き、学び、受け入れて生きることによって初めて、この時代に光を照らすことができるのであります。

先週は、口を開いて神を讃美し、讃美の歌声をもって 私たちの心を満たしましょうと言いましたが、今回は、私たちの耳を開いて、神の言葉を聞く者となりましょう。人の言葉ではないのです。神の言葉に耳を澄ませ、それを聞き取り、多くの人々と共に御言葉を分かち合う者となるよう、今年も主のしもべとして、共に励んでまいりましょう。